正課内外のキャリア教育

ー　山口大学学生支援センター10 年の歩み　ー

平尾　元彦

要旨

山口大学学生支援センターは、学生生活全般を支援する組織として 2003 年に設置され、このうち就職支援部は、学生の就職活動を支援するとともに、全学のキャリア教育の一部を担ってきた。その特徴は、正課内外のキャリア教育である。キャリア教育の授業に加えて、学内業界・企業研究会、インターンシップ、本から学ぶキャリア学習など、多様で多彩な課外学習機会を創出し、授業との連動によって成果をあげてきた。今後、①新しい教育体制とキャリア教育の拡充、②地域社会との連携によるキャリア教育の高度化、③キャリアの力が弱い学生への支援体制の構築が課題となる。

キーワード

キャリア教育，キャリア学習，インターンシップ，就職支援，正課内外

１．はじめに

大学設置基準に新たな条文が加わり 2011 年４月に施行された。第 42 条の２「社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制の整備」は、「キャリア教育の義務化」との見出しで報道されるなど、すべての大学にキャリア教育の体制整備が求めるものである。

就職しない大学卒業生の増加、早期離職の問題など若者をめぐる様々な問題が日本社会を覆うなか、大学は、社会的・職業的自立のための能力育成に取り組まなければならない。単に、就職講座を実施すればよい、相談員を置けばよいというものではない。「学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整える」（同設置基準）ことを求めるものであるが、具体的な教育内容や方法は、各大学の主体的な判断に任せられる。それぞれの大学の教育目標に応じた、効果的なキャリア教育の実施が求められているのである。

山口大学では、2000 年に共通教育科目「ザ・就職」を開講、翌年から「キャリアデザイン」へと発展させ、文系・理系別の全学的キャリア教育科目がスタートした。このときの事情を描いた藤原（2002）は、「びっくり仰天の就職率」という表現で、キャリア教育スタートの背景を語る。急激な社会の変化と変容する学生に接し、低学年から就業意識を高める教育の必要性を訴えている。

法人化前年の 2003 年、山口大学に学生支援センターが設置された。学生相談部・学生生活支援部・就職支援部の３部門とし、センター

> 学生支援センター　理念・目的
>
> 「学生中心の大学」へと視点を向け、学生の人間的な成長と自立を促し、社会の要請するニーズに対応できる能力を育てるために、学生の修学・課外活動・就職活動など、学生生活全般にわたる支援体制の充実発展に寄与することを目指します。

長・部門主事（併任）、そして、専任教員２名の体制である。うち就職支援部は、事務担当組織である学生生活課（当時）と連携して、就職支援とキャリア教育を担うことになった。これまで実施してきた低学年向け授業のほかに、3年生以上を対象とする高学年向け科目の実施や、とくにコミュニケーションが苦手な学生向けの少人数授業を行うなど、キャリア教育のバリエーションも増えてきた。同時に力をいれたのは、授業以外の取り組みである。

山口大学では、授業と授業外の様々な支援活動が連携しながら学生の就業力を高める取り組みに力を入れてきた。本稿は、学生支援センター・就職支援部 10 年間の正課内外の活動を報告するとともに、目下の課題を明らかにすることで、よりよいキャリア教育への方向性を見出したい。

２　山口大学のキャリア教育の特徴

2.1　教育連携・相談重視

山口大学のキャリア教育の特徴を表す言葉に“教育連携”＆“相談重視”がある。この言葉は 2007 年ごろから使われはじめた。すべての学部を対象とする共通教育科目「キャリアデザイン」「キャリアと就職」などの授業のほか、毎年 11 月～２月に企業・官公庁等の皆様をキャンパスにお招きして開催する「学内業界・企業研究会」など授業ではない多数の学習機会を連動させている。例えば、研究会に来学したビジネスパーソンへのインタビューを授業レポートに課すなど、多様で多彩な学びの場を活用しながら、学生たちの力を高めるキャリア教育を実現する。

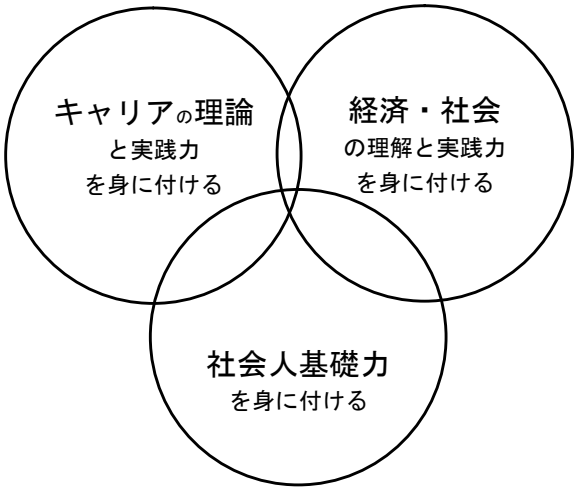
もうひとつ大切にしていることは、個性を大切にしたキャリア教育である。学生の興味・能力・価値観は個々に異なる。ともすれば集団でとらえがちになるが、学ぶべき“キャリア”は人によって異なると考えたい。そんな学生たちに向き合うには、一人ひとりへの個別支援が大切であり、これを「相談重視」との言葉で表現する。キャリアカウンセリングの拡充など、きめ細やかなキャリア支援を目指している。

2.2　キャリア学習

深い専門性と幅広い教養を身につけるとともに、「キャリアを学ぶ」ことも大学で学ぶべきことである。「自分のキャリアは自分で考えて選択する」ための力を高める学習が必要となり、このことを端的に表す言葉が「キャリア学習」である。キャリア教育が大学側の言葉だとすると、キャリア学習は学生側。キャリアを自ら学ぶということである。もちろん学習が円滑に進むための考え方や方法論を教授することや、学びの場の提供は大学の責務として実施をするが、基本的には学生自らが学ぶ。授業科目はキャリア学習の入口であって、それがすべてではないと考えている。

キャリア学習は、①キャリアの理論と実践力、②経済・社会の理解と実践力、③社会人基礎力を身につけることを目標に掲げ、正課内外の学習の場を創出してきた。ここでのキャリアの理論とは、代表的なキャリア論を理解することのみを指すものではなく、「いろいろな人のいろいろな働き方」を学ぶことを重視する。偉大な経営者や研究者もあれば、身近な家族や先輩たちの生き方・働き方を学び、そこから自分自身の価値観を見出していく。

経済・社会の理解は、キャリアを学ぶ大学生にとって極めて重要だと考えている。社会科学を専攻する学生は学業を通じて身につく面もあるが、人文科学や自然科学など多くの大学生がカリキュラムのなかで経済・社会を学ぶ機会は少ない。だからこそ、自ら意識して学ばなければならない。詳細は後述するが、全学組織である学生支援センターは、経済学部以外の学生たちを念頭に様々な学習機会をつくってきた。そもそも知らないものには興味がもてない。まずは世の中のこと、会社・仕事を知ることから



1．キャリアの理論と実践力を身に付ける
さまざまなキャリアに関する理論、そして、働く人たちの軌跡と想いを学び、かつ、実践する力を身に付けて、自らのキャリア選択の力を養います。

2．経済・社会の理解と実践力を身に付ける
働くこと、会社のこと、業界のことなど、広く経済・社会を理解する力を身に付けるとともに、ビジネスマインドを養います。

3．社会人基礎力を身に付ける
社会で働く上で必要となる基礎的な力を理解し、自ら継続的に高めていく力を養います。

図１　キャリア学習の目標

始めようとのメッセージを発信している。

社会人基礎力は、2006 年に経済産業省が提唱した概念で、山口大学では2008年に同省「体系的な社会人基礎力育成・評価システム構築事業」を受けて強化してきた[1)]。社会で働く上で専門の力が重要なのは言うまでもないが、同時に、基礎力も大切であること。そしてこれは大学生活を通じて高めていかなければならないことを学生に伝える。とくに重視するのは「頭でわかる」こと。基礎力の育成に実践が必要なのは当然である。が、メカニズムを理解するともっと早く身に付く可能性がある。「大学生なんだから頭を使おう」とのメッセージを発信しつつ、社会で必要な力に関する本を読み実践することを勧めている。

2.3　キャリア教育の基本方針

山口大学は 2011 年４月、「キャリア教育の基本方針」を定めた。上記、キャリア教育の特徴をすべてここに集約し、学内で再認識するとともに、広く社会に対して説明するものである。

大学は、多くの若者にとって社会に出る直前の段階であり、自らの視野を広げ、進路を具体化していく段階にある。とくに今日の経済・社会状況の激しい変化や価値観の多様化が進む現代にあっては、大学において社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を養うことはますます重要となる。このことが、制定の背景にある。

この方針に基づき、キャリア教育科目の必修化や学生ポートフォリオの導入に向けて動き出した。これまで個々に推進してきた山口大学

山口大学 キャリア教育の基本方針

山口大学は、教養教育・専門教育、そして、正課外の様々な活動を通じて、山口大学憲章に掲げた、自らの未来を切り開くことのできる人材を育成していくため、ここにキャリア教育の基本方針を定め、全学的にキャリア教育を推進していきます。

1．大学におけるすべての教育研究活動を通じて、学生のキャリア形成を支援する
2．就業する力・進路を選択する力をつけるためのキャリア学習の場を提供する
3．学生のキャリアビジョンを明確にさせ、社会的・職業的自立にむけて指導する

の取り組みを、「キャリア教育」の名のもとに集結させ、全学的な拡充を目指している。

３　キャリア教育科目

教育課程に位置付ける様々な授業のなかで、キャリア教育は展開される。卒業論文やゼミナール、実験・演習ほか、大学にはキャリアの力を高める様々な科目はあるが、ここでは、学生支援センターの教員が担当する共通教育科目の取り組みを紹介したい。

3.1　総合教養

山口大学では、各学部・共通教育などの単位で、卒業生が備える資質をグラデュエーション・ポリシー（ＧＰ）として定め、各科目との関係をカリキュラム・マップとして公開している。全体としてどのような教育を行っているのか、何を目指しているのか明示するものである。総合教養は、共通教育のＧＰ７（学際領域）「幅広い領域の知識に触れ，特定の専門分野を超えた複合的な視点を確立するとともに、そこから自らの将来を見つめることができる」に位置付けられる科目群で、「知の広場」「国際交流論」「自然科学と現代社会」など、学問と社会とのかかわりを中心に多様な視点から講義をすすめる。学部・学科によって異なるが、おおむねこれら科目のなかから１～２科目の履修が卒業要件となる。

学生支援センターの教員が担当する科目には、主に１年次を対象とする「キャリアデザイン」「ボランティアと自主活動」、主に３年次を対象とする「キャリアと就職」「キャリア形成とコミュニケーション」がある。それぞれに課外活動と連動して効果をあげるものであるが、ここでは、本学の中核的キャリア教育科目である「キャリアと就職」について、詳細を報告したい。

3.2　「キャリアと就職」

３年生を主対象とする高学年教養として、キャリアを学ぶこと、そして、就職にむけて必要な知識の獲得を目指して 2004 年に開講した。初年度は１クラス 358 人であったが、学生が履修しやすい時間帯に開講すること、授業数を増やすことで、2012 年度は 840 名が履修した。前期に４クラスを開講する吉田キャンパスでは、このキャンパスの３年生の約６割が受講する大規模科目となっている。後期は常盤キャンパスで１クラス開講する。

この授業ではキャリア学習の導入教育をするほか、前期はインターンシップ、後期は学内業界・企業研究会などの学習機会との連動を図ることで効果をあげてきた。現在は１クラス 100～300 名で、基本的には着席した学生に対

2012 年度　前期　総合教養「キャリアと就職」　シラバスに記載する授業概要

キャリアとは、職業経験、働く力。仕事にかかわる人生経路を意味する言葉である。学生は皆、大学を卒業（あるいは大学院を修了）して新たな活躍のステージへと移行するが、自分自身の将来のキャリアを考えて進路選択をすることが望ましい。その最初の活動が大学生の就職活動であり、大学院への進学を含む進路選択活動である。本講義は、「自分のキャリアは自分で考える」ための考え方を理解するとともに、働くための基礎知識を得ることを目的とするものであり、経済・社会、企業、そして自己理解のための理論および現実を学ぶことで、将来のキャリア選択や、現実問題として直面する就職活動に役立つ知識と方法論の習得をめざす。

授業は講義形式で行うが、一人一人が自分の問題としてキャリアを考えることができるように、宿題レポートを多数とりいれた実践的な講義をめざしている。学んだことは自分の就職活動にいかしてほしい。

総合教養「キャリアと就職」課題レポート

前期：吉田キャンパス（人文・教育・経済・理・農）

課題レポート①　就活 Information

山口大学の先輩たちの就職活動体験談を経験した雑誌「就活 Information」（大学生協発行：無料）を読み、先輩の体験を通じて就職活動で必要なことを学ぶ。

課題レポート②　社会人基礎力

独自に構築した基礎力診断システムを活用。自分が高めるべき要素をマニフェストとして宣言し、レポート提出日までに実践・評価する。関連する本を一冊以上読むことが求められる。

課題レポート③　キャリアインタビュー

身近な人生の先輩に話を聞く。親、先生など誰でもよいが対面インタビューを基本とする。職業インタビューではない。仕事経験のなかから必要な能力や転機など、キャリアの足跡を学ぶ。

課題レポート④　キャリアモデル

人生の先輩の働き方を「本」から学ぶ。偉大な経営者や技術者たちのキャリアを学ぶことで、共感する価値観を見出す。

課題レポート⑤　就活インタビュー

就職活動を終えた４年生にインタビューをする。取材して書く力を身につけるとともに、キャリア形成の当面の課題として直面する就職活動をリアルに学ぶ。

課題レポート⑥　キャリアデザイン

授業で学んだ“キャリア”に関する自身の考えをまとめる。400 字の字数制限を設けて、コンパクトな文章で相手に伝える表現力を学ぶ

後期：常盤キャンパス（工）

課題レポート①　社会人基礎力　　同上

課題レポート②　キャリアモデル　同上

課題レポート③　社会人インタビュー

技術者として活躍する人生の先輩へのインタビューを通じて、技術者として必要な資質を学ぶ。11 月から開催する学内業界・企業研究会を実践の場として活用する。

して講師が語りかけるスタイルとなる。大教室の授業は多くの学生に一斉に伝達するには効果的であるが、学生は受け身にならざるをえない面もある。多くの学生を受講させることと、自分の問題としてキャリアを考えることを同時に達成する工夫が必要なのである。

大教室では、キャリアの理論の講義を聞いて学ぶことはできても、それが自分にとってどのような意味があるのかは、自ら学習するしかない。自主学習の代表的ツールは「人」と「本」。インタビューの技法や新聞の活用法などを授業で学ぶとともに、レポート課題を複数課し、それらを成績評価に用いる。各年次で改良を加えながら課題を設定し、現在はほぼ上記の内容で実施している[2)]。

課題レポート一つひとつはＡ４紙１枚のコンパクトなものではあるが、すべて自分の考えを表現しなければならない。インタビュー課題は、実際に会って話を聞くことを要求するもので、学内業界・企業研究会や、インターンシップ、学内 OBOG 訪問、先輩による就活応援セミナーなど、課外行事として企画されるキャリア支援の取り組みを活用できる。また、本を活用する課題では、就職支援室および図書館のコーナーを利用できる。学生たちは正課外の学習機会を有効に活用してレポートを作成する。

４　正課外のキャリア教育

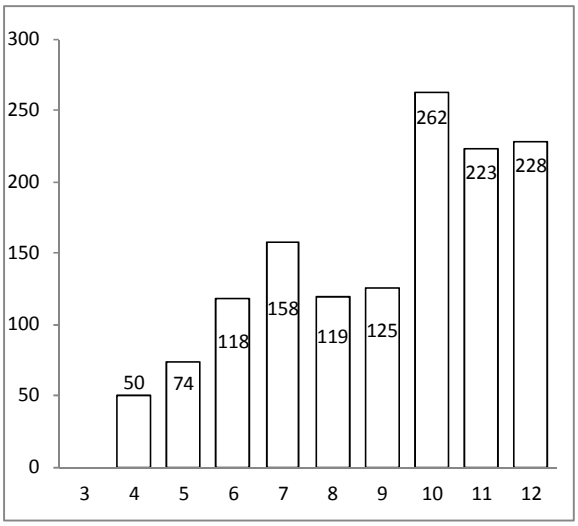
「キャリアを学ぶのは授業だけではない」。冒頭に述べたように正課内外のキャリア教育が連動しながら効果を発揮するのが山口大学の特徴である。ここでは、授業以外の取り組みについて、授業との関連性を含めて詳述したい。

4.1　インターンシップ・１ｄａｙ学習会

2010 年４月、山口県インターンシップ推進協議会が設立されると同時に、山口大学で全学インターンシップが動き出した。それ以前は、各学部の専門科目の一部として実施するもの、就職支援として実施するものがあって、いずれも学部事務室を窓口として運用してきた。

山口県インターンシップ推進協議会は県内のすべての大学と、短大・高専・専門学校等、そして、経済団体がメンバーとなって設立した産学公連携の組織であり、それ以前の山口県経営者協会によるインターンシップを引き継いだ。山口大学の実績は図１のとおりである。

全学インターンシップは、窓口を学生支援センター／就職支援室に一本化し（ただし工学部は別キャンパスのため工学部学生係が窓口となる）、課外学習のひとつとして実施する[3)]。もちろん就職ナビ等で募集される公募型や、学部独自のインターンシップもある。それらを含めて授業のなかで意義を説明し、参加を呼びかける。



注）山口県経営者協会・山口県インターンシップ推進協議会のインターンシップに参加した山口大学の学生数。2004 年度～12 年度実績

図１　インターンシップ参加学生数

> 山口県インターンシップ推進協議会（目的）
>
> 本会は，山口県の高等教育機関等，事業所，経済団体，行政機関が相互に連携・協力し，企業等へのインターンシップ事業を通じて高い職業意識の育成を円滑かつ効率的に推進し県内の高等教育全体の質的向上に資するとともに，山口県の経済・社会の活性化に貢献することを目的とする。

同協議会は、基本的には職場受入・就業体験・５日間以上のインターンシップを斡旋するもので、2012 年度は 228 名の学生が夏休みに県内事業所で体験した。これは一学年２千人が学ぶ山口大学にとって１割程にすぎない。就業を体験させることができる受入事業所が限られることに加え、学生の多くが居住する山口市内に民間の事業所が少ないという県土構造上の特性もある。また、学生の希望が多い金融・情報システム・研究開発にかかわる業務での受入が県内ではごく限られることもあって、数を増やすことは難しい。

一方で、就業体験でなくても学べることはある。学生支援センターは山口県インターンシップ推進協議会の協力を得て、2012 年夏に「キャリアを学ぶ！☆１ｄａｙ学習会」を試行した。複数の大学の学生たちが一緒に学ぶ学習会で、企業等の協力を受けて、山口大学の教室、あるいは、企業の会議室で実施した。12 月までの実績は６回、のべ 119 人が働くことをリアルに学ぶ機会となった。このほか山口大学独自に「山口県の中小企業を学ぶ」をテーマとするスタディツアーを実施した。周南市で開催された山口総合ビジネスメッセへの参加、および、下

キャリアを学ぶ！ ☆ １ｄａｙ学習会　2012 年度実績

８月６日（月）	「キャリアを学ぶ実践プログラム」　協力機関：豆子郎・アチーブメント
８月７日（火）	「経営者からビジネスを学ぶ☆トップセミナー」 協力機関：丸久・中国警備保障・ＹＩＣグループ
８月 10 日（金）	「広告の仕事を学ぶ」　協力機関：きららﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ・山口県若者就職支援センター
８月 31 日（金）	「女性としての働き方を学ぶ」　協力機関：東京海上日動火災保険山口支店
９月７日（金）	「銀行の仕事を学ぶ」　協力機関：西京銀行
11 月 10 日（土）	「公務を担う人材を学ぶ」　協力機関：山口県庁

＊　このほか２月に防衛省自衛隊、厚生労働省山口労働局の協力で開催予定

松市の中特ホールディングスの工場見学である。インターンシップの重要性は言うまでもないが、受入の数と幅を広げる観点から、新しい課外学習の場の創出に乗り出している。

4.2　学内業界・企業研究会

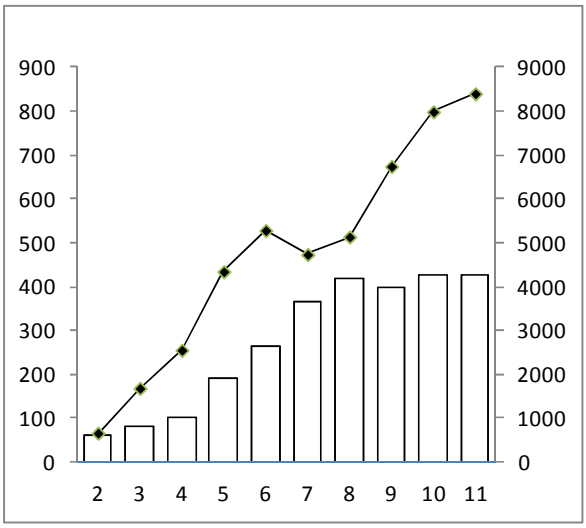
2000 年に始まった学内業界・企業研究会は、文字通り、山口大学のキャンパスで業界・企業を学ぶ場である。地方の大学の学生は職業への現実感覚が薄い面がある[4)]。身近にビジネスの場面がないので仕方ない面もあるが、キャリアを学ぶためには実際に働く人たちとの接触が有効だろう。もちろん企業が集まる都市部へ行けば学ぶことはできる。が、それには時間もお金もかかる。なにより大切なのは自分が学ぶべき学業に取り組みながらキャリアを広く深く学ぶこと。学業との両立を図る点から学内開催に力を入れてきた。

当初は後期試験終了後の２～３月の平日に吉田キャンパスの教室に数十社来ていただいていたが、学びの機会拡大を目指して、まずは、学期中（12 月～１月）の土曜日開催、食堂ブース方式の導入、常盤キャンパス開催へと開催方式・参加枠を増やしていった。さらに 2008 年には学期中（11 月～１月）平日の教室セミナー方式に踏み切った。比較的授業が少ない 16 時 30 分から 18 時の開催とし、授業・実験等と重なる学生には、希望があれば終了後の個別対応を企業にはお願いしている。学びの機会を増やすための取り組みである。

今では年間 400 社ほど参加いただく山口大学の学内業界・企業研究会の特徴は、開催日程の多さにある。期間中はほぼ毎日、研究会を開

吉田キャンパス・教室セミナー方式

常盤キャンパス・食堂ブース方式



注）棒グラフ：参加企業数（のべ数）左目盛り
折れ線グラフ：参加学生数（のべ数）右目盛り
2002 年度～11 年度実績

図２　学内業界・企業研究会参加実績

催するほか、土曜日・祝日のブース方式も複数回を開催する。日数が多いことで一人の学生はたくさんの研究会に参加することができ、様々な業界・企業をリアルに学ぶことができる。

この研究会は、企業が大学のなかで開催する、いわゆる「学内セミナー」と似たものではあるが、これはあくまでも学生が学ぶための「研究会」で、大学のキャリア教育の一環として開催する学びの場である。以下の趣旨を制定したのは 2005 年で、以後、この考え方のもとに拡充させてきた。「学内」と「研究会」の２つの言葉にこだわりつつ、企業・官公庁には、この趣旨を理解いただいた上で、参加していただいている。

学内業界・企業研究会　趣旨

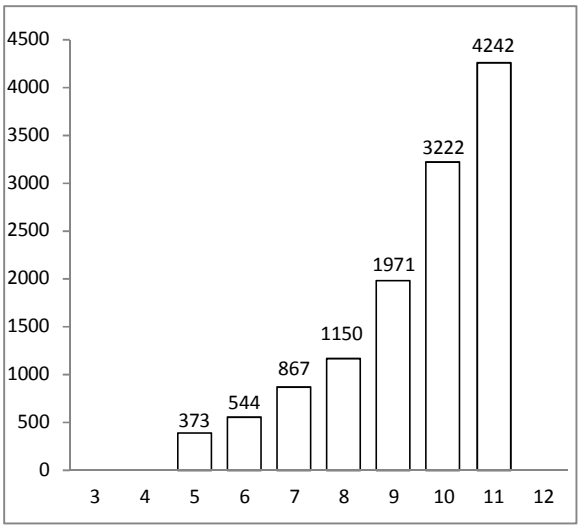
学内業界・企業研究会とは、山口大学の学生が、業界動向や会社・仕事をより深く、よりリアルに理解できるよう、経営者・人事担当者、また、本学の卒業生など会社等でご活躍の皆様をキャンパスにお招きして開催する研究会です。本学ではこの学内業界・企業研究会をキャリア教育の一環と位置づけており、学生たちはこの機会を活用して、幅広く業界・企業を研究し、就職活動ならびに自身のキャリア形成に役立てることを期待しています。

4.3　本から学ぶキャリア学習

キャリアを学ぶツールとして「本」を重視している。就職支援室では、面接対策本や業界研究本の横の特設コーナーとして、2006 年に「“働く”を研究する書籍コーナー」、2008 年に「大学生の“基礎力”を学ぶ書籍コーナー」を設置した。現在、それぞれ 400 冊ほどの本を集める。統計をとりはじめた 2005 年度に比べると年間貸出冊数は 10 倍を超えた。授業のレポート課題で初期利用を促し、その後、自主学習や就職活動で利用する学生も多い。

2010 年には、総合図書館・工学部図書館に「キャリア学習・就職活動支援コーナー」を設置した。就職支援室の利用は、どうしても就職活動に取り組む３～４年生が中心となるが、低学年からのキャリア学習を推進するため、かつ、就職支援室を利用することのない医療系・学校教員を目指す学生にも本から学ぶキャリア学習を広める効果を発揮している。

毎年２～３回開催するキャリア学習講演会は、著名な作家の先生をお招きする講演会で、



注）2005 年～11 年度実績

図３　就職支援室年間図書貸出冊数

就職支援室“働く”を研究する書籍コーナー

総合図書館「キャリア学習・就職活動支援コーナー」

キャリア学習講演会実績

講演「大学生よ、本を読め！」　2010 年 11 月 20 日（土）
　　『就活難民にならないための大学生活 30 のルール』著者・常見陽平氏
講演「大学で学んでおきたい仕事のルール」　2011 年5月 25 日（水）
　　『会社では教えてくれない仕事のルール』著者・長井亮氏
講演「大学生に学んでほしい企業家たちの熱き想い」　2011 年 11 月 15 日（火）・16 日（水）
　　『ドラッカーと松下幸之助』著者・渡邊祐介氏
講演「大学生に伝えたい！カン違いしない就職活動」　2011 年 11 月 18 日（金）
　　『だから内定をのがす！もったいないカン違い 45』著者・梅田幸子氏
講演「プロフェッショナルサラリーマン」　2012 年 11 月 13 日（火）
　　『プロフェッショナルサラリーマン』著者・俣野成敏氏
講演「社会で活躍する人になるための学ぶ技術」　2012 年 11 月 14 日（水）
　　『限界を突破する学ぶ技術』著者・羽根拓也氏

本にまつわるエピソードをお話いただくとともに山大生へのアドバイスもいただく。キャリアを学ぶとき「本」は大切な学習ツールとなることを認識させ、キャリア学習を啓蒙する取り組みである。「キャリアデザイン」「キャリアと就職」の授業で広報するとともに、学習課題とも連動させている。

新聞も重要な学びのツールである。経済・社会を理解するとともに、読解力・表現力を高めるもので、新聞社の協力を得て「新聞の読み方講座」「日経 TEST 勉強会」などを月 1 回以上のペースで開催してきた。これも正課外のキャリア教育の取り組みである。

4.4　就職相談・キャリアカウンセリング

キャリア教育の基盤として相談機能の強化を図ってきた。学生支援センターができた 2003 年度の年間相談は 381 件。吉田キャンパスに相談員 1 名・週 3 日体制であった。その後、2005 年 4 月に山口大学吉田キャンパスが山口県若者就職支援センター（ジョブカフェ山口）のブランチとなり、同センターのキャリアカウンセラーが週 2 日常駐することになったことを受けて、キャリアカウンセリングを導入した。

現在、吉田キャンパス・週５日、常盤キャンパス・週１日を基本として、学生の相談ニーズが高まる 12 月~３月はキャリアカウンセラーを増員して対応しており、2007 年度以降はおおむね年間 2700 件程度で推移する。民間企業での経験を持つ就職アドバイザー、キャリアカウンセラーのほか、山口県若者就職支援センター、山口新卒応援ハローワークにも協力をお願いしている。当初に比べると相談件数は大幅に増加しており、教育連携・相談重視の様々な取り組みの効果と考えている。

一人ひとりの学生のキャリアを支援するために個別相談は欠かせない。授業でカウンセリングの理論を学び、キャリア形成における意義を理解する。そして、就職支援室でのキャリアカウンセリングを受けて、自分自身を見つめ直す機会にしてほしい。相談したいことがわからなくてもいい。「健康診断を受けるようにキャリアカウンセリングを受けよう」とのメッセージを発信しつつ、個別支援を強めている。

4.5　広報体制

様々なキャリア学習の機会は、掲示ならびに電子メールで学生に伝えられる。各学部棟・図書館・学生食堂など学内に 17 箇所ある学生支援センター掲示板には、常に最新の情報が貼り出されるほか、Web 掲示板（学内限定）にて同ポスターを閲覧できる。

毎週月曜日に発行する「学生支援センター／就職 NEWS」は、2003 年４月に第１号が発行されて以来続く電子メールの全学情報である。学生支援センターの専任教員が学部の就職担当教員へ、週一回最新情報を送信するものであるが、各学部で教職員や学生に転送されるため、発行部数は毎号数千部に及ぶ。キャリア学習・就職支援の重要な情報源となっている。

このほか、「キャリア学習は授業だけにとどまらない」との方針のもと、「キャリアと就職」を履修登録した約 800 名の学生には、キャリア学習支援のメール「キャリ学メール」が配信される。授業が行われている学期中はもちろん、前期の履修者（主に３年生）については夏休み以降、そして、４年生になってからも、学内のキャリア学習の情報が担当教員のコメント付きで提供される。３～４年生の２年間に 150 通ほどのメールを届けることで、キャリア学習の継続を促す基盤となっている。

５　キャリア教育の展望と課題

学生支援センターが設置された 10 年前、「キャリア教育」は一部の関係者だけの言葉であった。が、今では学校関係者はもとより、社会一般に定着した感はある。ただし、この言葉は誤解をもって語られることも多い。すなわちキャリア教育とは、「学校でキャリアの授業行うことだ」。「そういう科目をつくればよい」。「インターンシップをやればよい」。そう思われている面もある。だが、これはキャリア教育のほんの一部を語っているにすぎない。目指すところは若者たちの社会的・職業的自立のための能力を養うことだということを、忘れてはならない。そのためにあらゆる教育資源を投入して実行する総合的な教育なのである。

山口大学では、キャリアの授業を教育課程に位置付けるとともに、自分の問題としてキャリアを考えるレポートを課すことで、授業外学習を求めた。さらに正課外の学習機会をつくること、かつ、授業と連動させることで学びの深化を図ってきた。こうした取り組みを「キャリア教育の基本方針」へと発展させ、「すべての教育研究活動を通して学生のキャリアを支援する」ことを宣言した。学生支援センター設立から 10 年、少しずつではあるが「正課内外のキャリア教育」の推進に成果をあげてきたと考えている。その全体像は図４にようになる。

しかしながら課題も多い。とくに重視すべき３つの課題を整理して、本稿のまとめとしたい。

新しい教育体制とキャリア教育の拡充

すべての学生にキャリア教育を。しかも一人ひとりのキャリアの力を高めていく。そのためには学習機会が必要であり、「量」の拡大は喫緊の課題となっている。

2013 年４月から新しい共通教育が始まる。すべての科目をクォーター１単位とし、学部・学科で学ぶべき科目を明確にする。そのなかでキャリア教育科目は全学必修となり、原則として「知の広場」を１年次で、「キャリア教育」を３年次に履修する。高学年教養として開講してきた「キャリアと就職」は、単位数が２から１になるが、すべての学生が履修することになるため、受講生はほぼ倍増する。これまでの教育連携の成果を活かしながら授業外の学習機会との連動をはかっていかなければならないが、そのためには課外学習の量的拡大が必要となる。授業は自ら学ぶための入口だと理解すると、授業外学習の教材やサポート体制の充実がいっそう求められ、この体制づくりを急がなければならない。

求めるものは機会の拡大ではなく成果の拡大である。意欲的に参加する学生はよいが、そうでない学生もいる。電子メール・掲示板で広報はするものの、見ていない、あるいは、見たとしても関心がない。そんな学生は少なからずいる。正課外の取り組みは、あくまでも自主的なものであって強制力を求めるものではない。必修授業を核とした正課内外のキャリア教育の連動をどのようにデザインしていくべきか、今、新たな課題に直面している。

地域社会との連携とキャリア教育の高度化

キャリア教育に産業界との連携は欠かせない。これまでもインターンシップの受け入れや学内業界・企業研究会の開催に、県内外の企業・官公庁に協力をいただいてきた。いろいろな人たちの働き方を知ったり、ビジネスの動きを理解するなど、リアルな学びの実現に地域社会との連携は不可欠である。本や Web サイトから学ぶこともあるが、実際に体験することの学びは大きい。

文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に採択され、2012 年度から３年間の予定で「中国・四国産業界の人材ニーズに対応した協働型人財育成事業」に

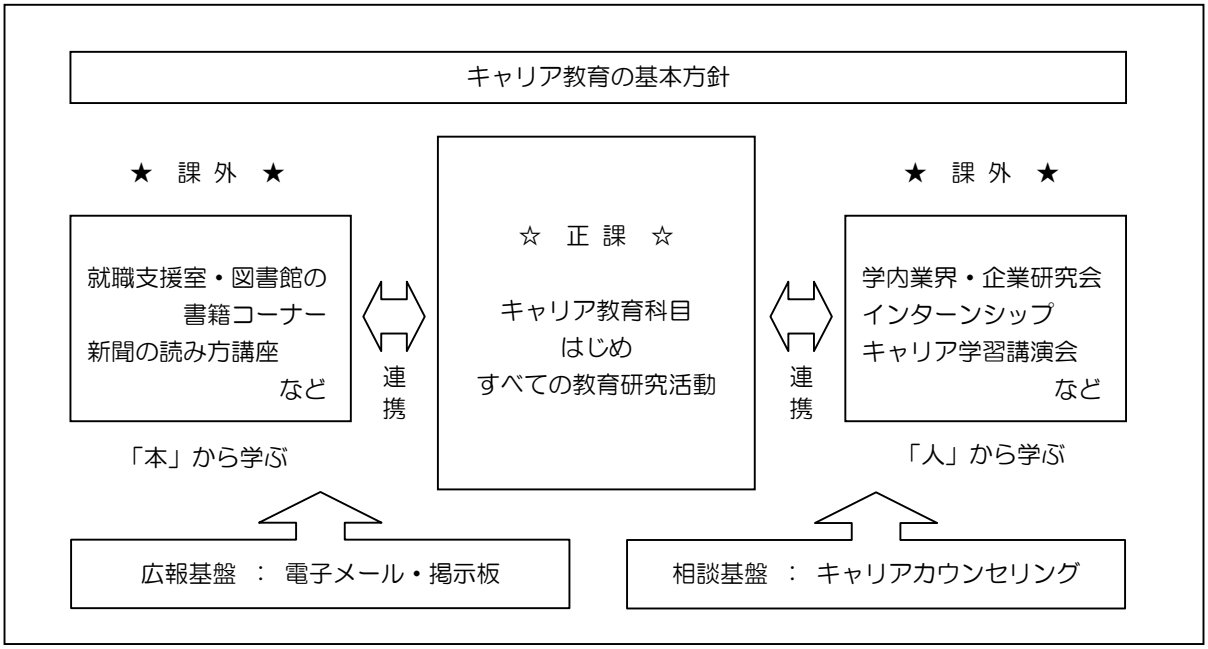


図４　山口大学の正課内外のキャリア教育

中国四国 13 大学と共同で取り組む。これまで企業にとっては社会貢献でしかなかった大学教育との連携を、互いにメリットと責任を持つ協働型へと発展を目指すものである。地域社会との“協働”の関係を構築して、キャリア教育の「質」を上げる取り組みを強化していかなければならない。

キャリアの力が弱い学生への支援体制の構築

キャリアを学ぶことが苦手な学生、嫌いな学生は、確実にいる。自らに向き合うことができない。他人とかかわることが難しい。働く自分が考えられないなど。学内に様々な学習機会があったとしても、敬遠し取り残される層である。キャリアを自ら高めていく力が弱い人たちと言うべきだろう。

すべての学生にキャリア教育を実現し、社会的・職業的自立に向けた力を高めるとき、こうした学生たちの教育成果を上げる活動は、難易度が高い。これまでも、コミュニケーションが苦手な学生の相談会やキャリアカウンセリングによる個別支援を実施してきたが、けっして十分に成果をあげているとは言えない。一方で、これから始まるキャリア教育の必修化や学生ポートフォリオの導入は、これまで接触さえも難しかった敬遠層とつながる可能性を高める。キャリアの力の弱い学生の早期かつ重点的な支援システムをどのように構築していくのか、学生支援センター次の 10 年の重点課題と考えている。

（学生支援センター　教授）

【参考文献】

藤井文武・平尾元彦，2010,「社会人基礎力を高める授業の実践－産学連携ＰＢＬ授業「アクティブラーニング」の取組－」,『大学教育』Vol.7，23-34

藤原貞雄，2002,「ニーズにあったキャリア・デザイン教育とは何か」,『大学と学生』No.456，25-31

平尾元彦，2003,「大学生のキャリア形成と地域問題」,『大学と学生』No.468，7-14

平尾元彦，2005a,「キャリア教育の手法としてのキャリアインタビュー」,『大学教育』Vol.2，pp.85-94

平尾元彦，2005b,「キャリア教育の手法としてのキャリアモデル」,『大学教育』Vol.2，95-104

平尾元彦，2006,「キャリア教育の手法としての個別学習課題」,『大学教育』Vol.3，145-160

平尾元彦・藤井文武・宮﨑結花，2010,「社会人基礎力の育成と自己目標管理－山口大学における CHECK-MANIFESTO-ACTION ループの試み－」,『大学教育』Vol.7，35-46

平尾元彦，2011,「インターンシップの就職活動への影響－山口大学2010年度４年生へのアンケート調査と内定状況調査に基づく考察」,『大学教育』(山口大学大学教育機構)，Vol.8，2011.3，pp.29-36

辻多聞，2004,「大学生の就職活動における学内セミナーの運営に関して－平成 15 年度山口大学業界・企業研究会の事例に基づいて－」,『大学教育』Vol.1，115-130

【注】

1）経済産業省「体系的な社会人基礎力育成・評価システム構築事業」に山口大学が提案した「学部 1 年で着手し CHECK-MANIFESTO-ACTION ループで定着させる継続的な社会人基礎力の育成と評価」が採択され 2008 年度に取り組んだ。藤井・平尾（2010）、平尾・藤井・宮﨑（2010）参照。

2）レポート課題の詳細と成果は、平尾（2005a）、平尾（2005b）、平尾（2006）参照

3）工学部・理学部・農学部は、条件を満たせば単位認定がなされる。

4）このあたりの事情は、平尾（2003）参照